

徳川中期における尾張一農村の考察

—— 葉栗郡里小牧村の農業構造 ——

岡 本 幸 雄

は し が き

- 一、村の概況（村高と概高制、土地構成）
- 二、中期農業の生産構造
- 三、農民の階層分化の状態
- 四、農民の階層関係

は し が き

本稿は徳川中期における尾張国一農村の社会経済的構造を、主として次の資料に依拠しながら叙述するものである。

寛保元年（一七四一）「里小牧村村高帳」

同 二年（一七四二）「高田畑分々帳」（五島家）

同 年 「八左衛門友四郎両人手作

覚」（五島家）

同 年 「田畑掟作帳」（五島家）

延享四年（一七四七）「御蔵入百姓高田畑書上帳」

寛延三年（一七五〇）「里小牧村田面附帳」

同 年 「人数改之帳」

宝暦二年（一七五二）「里小牧村畑方立毛植付帳」

同 年 「里小牧村諸事記」

右の資料から此処では寛保、延享、寛延、宝暦間における里小牧村の中期農業の生産構造、農民の階層分

化の状態と農民の階層關係といった二三の点をみようとするものであるが、もとより斯る問題は、この時期に必要な關係文書が殆んど存在せず、又右の限られた資料のみによつては充分に之を説明し得るものではない。従つて此処では右の問題に就いての限られた現象形態の把握にとどまらざるを得ないものである。しかし徳川中期のものとして尾張國農村の社會經濟的構造を窺うに、何等かの資に供し得るとすれば本稿の目的は一応之で足りる。

一、村の概況（村高と概高制、土地構成）

徳川時代における尾張國栗原郡里小牧村は、名古屋より美濃國加納、岐阜に至る岐阜街道に當つており、木曾川の対岸美濃笠松につなぐ渡船場を持ち、或は美濃街道起宿の渡船寄附村として存在し、早くから交通の開けた地にあつた。享保頃の五島家文書によればこの渡船に関して、村内に渡船二艘ありその内『壹艘は、

徳川中期における尾張一農村の考察（岡本）

年内半分程は御舟手と被仰付五里十里四方、諸大名衆御通り其外川方ニ而御用の重荷等御座候得は、罷出相勤』めるというように、貢租米その他領主荷、諸大名の通行という領主的要求をまづ充たすとともに、その半面右の渡船二艘と私鵜飼船三艘とをもつて、諸国人の往来、商人荷の運搬にたづさわつていたものである。③享保一九年の覺に『一、船賃一人に付四文ツ、一、商人荷壹駄に付十二文ツ、一、米一石に付八文ツ、一、諸士出家取不申、一、半水は五割増し大水は一ばいッ、』との旅人、商人荷、米等の木曾川横越渡船賃の規定があるが、このように諸大名、諸国人の往来、商品の流通の要路に當つていた里小牧村は、比較的早くから何らかの形において、商品・貨幣經濟との接觸をうけていたものと思われる。

ところで里小牧村の所領關係は寛文九年以降一圓御藏入地であり、この村の村高は第一表Aに示している如く、慶長一三年（一六〇八）九月の備前檢地において、三七三石四斗八升二合（田畑面積三八町一反八畝

第 1 表 A 村 高 の 交 遷

年 代	村 高	面 積	値 考
慶 長 13 年	石 373.482	畝 3818.23	前備検地
寛 永 19 年	12.065	187.20	山方新田繩入
正 保 3 年	572.543	4006.13	概高の時本高編入
寛 文 9 年	10.468	221.10	概 高*
延 宝 8 年	14.643	146.13	酉新田繩入
	597.654	4374.06	池新田繩入

第 1 表 B 尾張藩「四ツ概」

石以下切捨

	尾 州 分	濃 州 分	合 計
元 高	石 483,432	石 127,043	石 610,475
概 高	631,385	148,524	779,907
延	3割5厘1毛余	1割5分5厘3毛余	2割8分4厘5毛余

○ 愛知県史別巻636～8頁より作成

*第 1 表 C 里小牧村「四ツ概」

	備 前 検 地 分	山 方 新 田 分	合 計
元 高	石 373.482	石 12.065	石 385.547
概 高	565.455	7.088	572.543
延 ・ 縮	5割1分4厘余(延)	7割2厘1毛(縮)	4割8分5厘余(延)

○ 里小牧村地帳より

二(三)歩)であった。
然るに正保二年(一六四五)尾張藩が行った所謂「概高制」により、寛永一九年(一六四二)の山方新田一二石六升五合(田畑面積一町八反七畝二〇歩、正保二年本田高に編入)と併せ、五七二石五斗四升三合(田畑面積四〇町六畝一三歩)に村高の変更が行われたものである。
この概高制の意

義は、藩政初期既に生じていた所の財政的逼迫を救済する目的に出たものであり、これは同時に「知行替」^⑤（藩士知行元高を概高に置き替える）を伴なわしめる事により、始めてその実効を挙げ得たものであつて、所謂「知行制改革」による藩権力の拡大化策でもあつた。この概高制の実施の方法は、『正保二酉年御領國中村々、御免相高ニ四ツ以上之分ハ夫程高を延、四ツ以下之分ハ夫程高を縮め、一等ニ四ツ取之概高ニ成』^⑥即ち正保二年貢租率を四公六民と定め、この原則に基づき貢租率四割以上の高には石「延」を、それ以下の高には石「縮」の修正（「四ツ概」）を行う事をいい、尾張藩各村に対するかかる概高の結果を、藩領尾・濃州の二つに就いて見れば、第一表Bの如く修正されているが、里小牧村では第一表Cの如き修正を受けた事になっている。こうした概高制による村高の変更は、もとより田畑面積そのものの、その土地生産性の実質には関係なく行われた村高の名目的変更にとどまるものであり、又四公六民とはいへ、その実質には何等関係

なく、むしろ村高変更による諸役銀などの増徴によつて、却つて農民の負担を増したものであつた。（後述参照）概高制による里小牧村の村高変更の事情は、凡そ以上によつて明らかであろう。正保二年の概高制による里小牧村の村高は、その後寛文九年（一六六九）、延宝八年（一六八〇）に夫々若干の新田開発が行われ、本新田合せ五九七石六斗五升四合（田畑面積四三町七反四畝六歩）となり幕末に至っている。^⑦

次に土地構成の詳細に就いてみれば、第二表の如くなる。里小牧村における本田畑は四〇町六畝一三歩、新田畑三町六反七畝二三歩であるが、本田畑に就いてその土地構成を具体的にみると田は三八％、畑は五七％、屋敷五％の割合で、畑は田の一・五倍となっている。これ等田畑品位の構成は上田畑三七・九％、中田畑二二・九％、下田畑三四・二％となつていて、田畑品位の夫々の石盛は、表に示す如くである。この石盛にみる限りこの村の土地生産性は、一般の標準石盛よりやや低い状態を示している。これは『当村土地之事、

第 2 表 里小牧村土地構成（本田）

	石盛	田 畑 面 積			分 米			概石盛	概分米
		実 数	百 分 比		実 数	百 分 比			
上田	14	畝 627.03	41.3	15.7	石 87.794	47.6	22.8	斗 21.196	石 132.213
中田	12	360.28	23.7	9.0	43.312	23.5	11.2	18.168	66.133
下田	10	531.19 (48.06)	35.0	13.3	53.164 (4.820)	28.9	13.8	15.150 (5.875)	76.074 (2.832)
田計		1519.20 (48.06)	100.0	38.0	184.269 (4.820)	100.0	47.8		274.420 (2.832)
上畑	11	886.04	38.9	22.2	97.475	55.1	25.3	16.654	147.577
中畑	8	558.08 (9.02)	24.3	13.9	44.661 (.725)	25.2	11.6	12.112 (4.701)	66.945 (.426)
下畑	4	840.17 (130.12)	36.8	20.9	34.926 (6.520)	19.7	9.0	6.056 (2.937)	46.938 (3.830)
畑計		2284.29 (139.14)	100.0	57.0	177.062 (7.245)	100.0	45.9		261.460 (4.256)
屋敷	12	201.24	100.0	5.0	24.216	100.0	6.3	18.168	36.663
総計		4006.13 (187.20)		100.0	385.547 (12.065)		100.0		572.543 (7.088)

註 貞享，元祿，享保，宝暦，明和「里小牧村地帳」より作成

() 内は山方新田分を示す

西 新 田				池 新 田		
	石 盛	面 積	分 米	石 盛	面 積	分 米
下 田	9	畝 14.27	石 1.341	10	146.13	石 14.643
中 畑	7	4.24	.336			
下 畑	4	187.04	7.486			
屋 敷	9	14.15	1.305			
計		221.10	10.468		146.13	14.643

砂地大分ニ御座候而、くる土他所より入申候」とか或は木曾川沿岸近き田畑が「年々砂吹上ヶ只今小山之如く高ク罷成」本高之内吹埋禿地ニ罷成」といふようなこの村の土地事情に基づくものであらう。しかし宝暦二年（一七五二）里小牧村「諸事記」に記載されている反当実収量は「上之田一石五六斗之積、中之田一石三四斗之積、下之田一石一二斗之積、畑一石之積」とあって、右の石盛からみれば田は夫々一、二斗の増加、畑は平均二斗余の増加がみられ土地生産力に若干の上昇が認められる。

里小牧村における本新田畑の土地構成は表に示した如くであるが、なおこの村では本新田畑以外に本田野方見取所九反六畝二六歩（内、畑五反一三歩、草野七畝一〇歩、砂場五畝一八歩、萱野三反三畝一五歩）、木曾川堤外御見取所古起五町七反三畝一六歩（畑）、同堤外御見取所新起一町九反二畝一七歩（内、下田七反一畝二七歩、砂原一町二反二〇歩、正徳五年切起）、同二反六畝四歩（畑、元文二年切起）及び柳枯草場二

二町四反五畝二三歩等があり、以上の如き土地構成本新田畑四三町七反四畝六歩、見取所耕作可能面積七町二反二畝歩が、里小牧村の主たる経済的基盤をなすものであった。

ところで以上のような土地生産手段をもって、この村ではどのような農業生産が行われていたであらうか。以下ほぼ徳川中期における農業の生産構造に就いて考察する事からはじめたい。

二、中期農業の生産構造

封建農村における農業の生産構造は、本来封鎖的な自給自足の生産形態をとる。しかし都市城下町の形成その発達による商品需要の発生その一層の増大は、それに対応する封建農村をして、斯くの如き自給自足のな生産形態を逐次商品・貨幣経済的な生産形態へと変貌せしめていったものである。

寛延三年（一七五〇）「里小牧村田面附帳」宝暦二年（一七五二）「里小牧村畑方立毛植附帳」によれば、

第 3 表 寛延・宝暦畑方作付構成

		畝	生 綿 畝	粟・稗・ 大豆 畝	芋 畝	蕎麦・ 大根 畝
寛延三 一七五〇	作付面積	2285.00	730.00	615.00	510.00	430.00
	百 分 比	100.0	32.1	26.9	22.3	18.8
宝暦二 一七五二	作付面積	2285.00	830.00	580.00	485.00	390.00
	百 分 比	100.0	36.3	25.4	21.2	17.1

註 作付品目とその作付面積は、生綿、芋以外のものは、表の如く二三の品目と併わせ原資料に記載されていたものである。

第三表の如き作付状況を示している。われわれはまづこの作付構成の検討を通じて、里小牧村の農業の生産構造をみよう。

右二冊の帳は、本畑二二町八反四畝二九歩に対する作付状況を示したものである。本田一五町一反九畝二〇歩に就いては、全部稲作に向けられていたことが

ら、敢えて記載の必要がなかったであろうか、右の帳には直接の記載をみない。又新畑一町九反余、見取所畑七町二反余の作付記載もみないが、まづ右の本畑における作付状況に一瞥を与えよう。

里小牧村における作付品目は、寛延、宝暦ともに生綿、粟、稗、大豆、芋、蕎麦、大根となっていて、それらの作付面積比率は、畑方総作付面積中寛延において生綿が三一・一％、粟稗大豆二六・九％、芋二二・三％、蕎麦大根一八・八％、宝暦においては生綿三六・三％、粟稗大豆二五・四％、芋二一・二％、蕎麦大根一七・一％となっている。

ところで此処に注意を惹くことは、右二冊の作付中、村内の自給夫食的性格をもつと考えられる粟稗大豆芋蕎麦等の作付が、畑方総作付面積中大きく比重を占めているとはいえ、生綿作付が寛延三年七町三反（三一・一％）、本田畑総面積中の一九・二％）、宝暦二年八町三反（三六・三％、本田畑総面積中の二一・八％）に及んでおり、何れも他作付品目の首位に立っていると

いうことであろう。里小牧村におけるかかる綿作事情は、周知の如く、尾張の手作農民が、綿種を選別し遠く平野村（摂津）より種を買下し綿作を行っていた事情を伝える「百姓傳記」(天和頃)^⑨や、綿、綿織物の産地として九ヶ国をあげ、その中に尾張の名をとどめている「日本鹿子」(元祿)等の記述より推測し得るが如く、尾張国では元祿期或はそれ以前において、かなりの綿作が行われていたと考えられ、享保期に至っては、綿作を中心とした商業的農業が一般的に成立していたと考えられている、このようないわば綿作地帯の中にあつて、右の綿作は少なくとも商品化作物として作付けられていた事は明らかであろう。右の寛延、宝暦の作付比率は、作付総面積中において決して高いものとはいえないが、しかし綿作を他作付品目の首位におき、少なくともそれが商品化作物として、単一的集中的に作付されている傾向のみゆるところに、この時期における里小牧村は、少なくとも綿作農村としての性格をもつに至っているものとみても不当ではなからう。

ところである商業的農業の展開に関連して、里小牧村における肥料利用の面に就いてみよう。

宝暦二年の「諸事記」によれば、『当村畑方わた作ニハ少々こやし買候而作申候』とあり、生綿生産が購入肥料の利用によつて少なくとも行われていた事を明らかにしている。この村における肥料利用の主体は、二二町余の柳枯草場或は見取所内の苧草に求められていたものであつて、自給肥料が施肥の支柱をなすものであつたと考えられるが、しかし少なくとも右の如き商業的農業の展開は、即効性、生産性に富む購入肥料の利用を少なくとも要求し、これが主として畑方作付―畑方綿作―に向けられていたものである。このような所謂購入肥料の利用は、宝暦二年にとどまらず、元文元年（一七三六）の覚の断片に『干鰯、銀三百五十匁、八左衛門』とみえ、これによつて里小牧村農民の購入肥料として干鰯が利用せられていた事を窺う事が出来、更には元祿期においてすでに何等かの購入肥料が利用せられていた向の存すること、次の文書によ

つても窺い得る。

乍恐申上御訴訟之事

当村田畑近年薄田ニ罷成立毛出来悪敷、依是百姓年々ニ草刈半迄仕候文字不明拾年概免ニ来子ノ年々五七年も御定免ニ被仰付被下候は、金子借用仕こやしがい立毛宜風ニ作り、御百姓成立事風ニ仕度奉願候、願之通御定免ニ被為仰付被下候は、難在可奉存候事

（元祿八年）

里小牧村庄屋

亥ノ十二月

八 左 衛 門

これは元祿八年（一六九五）里小牧村における定免願訴訟文書であつて、肥料の問題の直接的資料とはなり得ないが、凡その推測を得ることが出来る。

右定免願の文意やや明確を欠くが、この願の意図するところは、要するに苛酷な検見制の下においては、金肥を用い生産力の向上をはかつて、それは農民自身の利益とはならず貢租として収奪されてしまう。しかし定免制の下においては、生産力の發展を阻む不時の事情が存在しない限り、金肥を用い生産をあげれば、

その生産力の向上部分、余剰を農民の手許に残し得る可能性をもつという見地から、十年概免による向う五七年の定免を願つたものであらう。此処で検見制、定免制の何れが農民或は農民間の階層に利益を与えるかの問題はともかく、当面の問題に直接関連するものとして注意を与えねばならないことは、『金子借用仕、こやしがい立毛宜風ニ作り云々』にみる如く、元祿期里小牧村では、購入肥料の利用をもつてすれば、生産力を高め得るとなす意識形態をもつに至っているということであらう。このことは、この村においてすでに少なくとも購入肥料の利用が実際に行われていたことを想像せしめる。しかしして少なくとも購入肥料の利用が行われていたとすれば、その貨幣的支出にみあうべき農産物の商品化、貨幣的收入を前提としなければならぬ。従つてこの限りにおいては、元祿期里小牧村における購入肥料の利用は、当然そこに何等かの農産物の商品化を行つていたことを想像せしめるものがある。しかしこのことをもつて、直ちに、元祿期の

里小牧村では、綿作の商品化が行われていたとなすことはもとより危険なことである。しかし、右の寛延、

宝暦のこの村の綿作事情や或は元禄享保期の綿作、その商品化の成立を考え得る当地方にあつて、かかる推測を生む可能性は残されている。この場合、いわゆる農民的商品の發展に基づくものと思われる尾張藩領六斉市の成立——例えば、里小牧村隣村黒田村（元禄元年）或は近村一ノ宮村（享保一二年）——が元禄享保期にあつたことを併せて考えるべきであろう。^⑩

以上里小牧村においては、元禄享保期或程度購入肥料をもつてする商業的農業（綿作）が行われていたものと推測され、しかも資料的には、寛延、宝暦において畑面積の約三分の一、本田畑面積の約五分の一の綿作を中心とした商業的農業が購入肥料（干鰯）の下に行われていた里小牧村のほぼ徳川中期における農業の生産構造は、もはや貢租納入と自活のための自給自足の生産形態でなく、商品・貨幣経済的な性格をかなり反映せしめている所の生産形態に変貌するに至つてい

るということを、凡そ以上によつて知ることが出来たであろう。

このような所謂商品・貨幣経済の農村への直接的な浸透は、その程度において、貢租の過重化と相俟ち所謂農民の階層分化を必然ならしめたものと考え得るが、里小牧村における農民の階層分化の状態及びその階層關係といった面に就いて、中期における様相を次にみよう。

三、農民の階級分化の状態

前述した如く寛延、宝暦における里小牧村では、既に商業的農業として少なくとも綿作を、単一的集中的に行つている傾向の見えること、いわば綿作農村たるの性格を少なくとも具えているものと指摘したが、斯る商業的農業の展開は、それに対応する農民の土地経営規模、土地生産方法の改善等によつて、農業経営の有利不利性を齎らし、延いては貧富の懸隔を大ならしめるものがあつたと思われる。今斯る点に就いての農

民の個々の農業経営の具体的分析を行う資料は、これを見ることは出来ないが、この点に關し宝暦二年の里小牧村「諸事記」に、『当村手作仕候有力之百姓、こやし買候而、立毛宜風に作申候得共、小百姓勝手不如意ニ御座候而買難く、少々こやし借請又は蒔敷のみニ而農ニ出精仕五六文字むし』とあって、土地生産方法の改善ニ購入肥料の利用を中心に、有力手作農民の経営の有利性に対し、零細農民の経営の不利性を説こうとしている。このような一つの農業経営面における両者の差異は、又農業経営面における貢租負担の事情にもよって、貧富の懸隔を増大ならしめたものと考えられる。里小牧村における貢租關係は、資料的に延宝五年（一六七七）より明治四年（一八七一）に至る約二百年間の貢租率の動態によって明らかならしめる事が出来るのであるが、これによれば、本田概高に対する貢租率は大体免三ツ五分前後となっていて、元高に対する實質的貢租率は免五ツ以上或は正保二年以前の六公四民の原則がそのまま貫徹せられていたものである。^⑬

ところで右のような高率貢租の下に立たされていた里小牧村農民の農業経営、農民の生活は極めて困難なものであつた事想像に難くなく、例えば、享保六年（一七二一）の里小牧村庄屋八左衛門の「庄屋役辞任願」文書の一節はこの点を明らかにしている。

『一、当村之儀―別而近年立毛出来悪く―立毛取実無數御座候処、近年御免相段こと高上罷成申候而、惣百姓中大ニ困窮仕、御年貢は不申及諸御役銀等も相勤り不申候而、何共可仕様も無御座私儀難儀仕候』『一、当村元高三百七拾三石四斗八升三合ニ而御座候処、五割一分四厘相延五百七拾二石五斗四升三合ニ罷成申候而、諸御役銀等も一倍に罷成、殊延高共ニ大分指上申候処、―已来村方之儀取乱、私儀も当年迄随分精に入御納所等も仕来申候得共、最早精力も尽し、此上諸御役銀等少もかけ可申と奉存候』

此処では貢租の『高上』と、先述に見た『概高制』による諸役銀の増徴、従つて農民の貢租諸役銀負担の過重化とその生活の困難を訴えているものであるが、

これによつて里小牧村農民の生活の困窮事情が充分に窺い得よう。しかしこのような貢租諸役銀の重圧は、等しく農民の農業経営、農民の生活をおびやかすものであつたといへ、貢租諸役銀の『高帳』による所謂比例課税の下にあつては、有力な富裕農民よりか、一般の零細農民にとつて負担は相対的に大となり、後者の農業経営、その生活をより困難ならしめるものがある。この点に就いて前記の里小牧村「諸事記」に『当村有力之高持百姓御年貢諸御役銀等相勤メ申候得共、小百姓賄成不申候而、御年貢等上納仕難ク御末進多ク在之候、是ハ御年貢諸御役銀、高掛ニ而御座候故、有力之高持百姓ハ輕ク相見ヘ申候得共、小百姓ニ而ハ、別而重ク相成候而、如斯相成申候哉』との記述をみる事は注目すべきであらう。このような高掛による貢租負担の相対的差異は、又貧富の懸隔を大ならしめるものがあつたと考えられる。

以上資料に則して述べ來つた事情の中に、既に所謂農民の階層分化―有力高持百姓と小百姓―の存在、又

これ等の層が一層分化して行く契機の一二の存在をみる事が出来たが、然らば里小牧村においては、所謂農民の階層分化は具体的にどの程度みられたであらうか、資料的に得られる寛保元年（一七四一）「里小牧村村高帳」、延享四年（一七四七）「御蔵入百姓持高田畑書上帳」の二冊に就いてみよう。

此処では寛保元年以前の階層の存在状態を見る事が出来ず、従つてそれとの比較において階層分化の進行状態はこれを窺い得ないものである。又此処で階層といつても商品・貨幣經濟の或程度の発達をみた農村における農民の階層を、石高保有規模のみをもつてしては正しく把握し得ないものであるが、しかし此処では右の両帳に表われる農民の石高保有規模を一応基準として、農民の階層分化の状態をみれば第四表の如くになり、この表において、農民の階層分化がかなり著しく行われている事をまづ知り得る。

即ち寛保元年においては高持総数一〇〇戸の内、零細高持と考えられる五石以下の層が七三戸、七三%の

第 4 表 農民の階層分化

	寛 保 元 年 (1741)				延 享 四 年 (1747)			
	高 持 数		所 有 石 高		高 持 数		所 有 石 高	
	実数	百分比	実 数	百分比	実数	百分比	実 数	百分比
100石以上	1	1.0	121.218	20.3	1	1.0	102.773	17.2
50~100	1	1.0	75.856	12.7	1	1.0	82.111	13.7
30~50	1	1.0	30.245	5.1	1	1.0	31.446	5.2
20~30	2	2.0	50.186	8.4	2	2.1	52.314	8.7
10~20	8	8.0	104.470	17.5	7	7.2	104.909	17.7
5~10	14	14.0	95.070	15.9	18	18.6	127.726	21.4
1~5	41	41.0	110.039	18.4	30	30.9	84.020	14.0
1石以下	32	32.0	10.570	1.7	37	38.2	12.395	2.1
計	100	100.0	597.654	100.0	97	100.0	597.654	100.0

多きに達し、その所有石高は村高五九七石六斗五升四合の内一二〇石六斗九合、二〇・一%となっており、その内訳は、一ノ五石層が四一戸で一一〇石三升九合一戸当平均二石六斗八升余の極めて零細な所有石高となっているが、一石以下の層はなお甚しく三二戸でもって僅か一〇石五斗七升一戸当平均三斗三升という全く無高水呑層と変らぬ状態を示している。この事は現実には無高水呑層の存在した事を予想せしめる。この点に就いて寛保の村高帳では直接知り得ないが、寛保元年より四年前の元文二年（一七三七）巳十一月の「覚」に『里小牧村惣百姓一二九軒、内高持九六軒、無高三三軒』とあり、高持無高の割合は前者七四・四%、後者二五・六%全戸数の約四分の一強となっていて、寛保における現実の無高水呑層の存在に凡その見当を与えてくれている。以上のような大多数の零細高持或は無高水呑層の存在に対し、この村のいわば上農層ともみるべき二〇一〇〇石以上層は、僅か五人であるが、その所有

第 5 表 寛保・延享間の階層変動関係

	寛保元年	延享四年	各階層変動関係	変動数
	100	97		-3
100 石以上	1	1	→ 0	0
50 ~ 100	1	1	→ 0	0
30 ~ 50	1	1	→ -1 ↑ +1	0
20 ~ 30	2	2	→ -1 ↑ +1 (-1 分家)	0
15 ~ 20	1	3	→ -1 ↑ +1	+2
10 ~ 15	7	4	→ -1 ↓ -2	-3
7 ~ 10	7	9	→ -1 ↑ +1	+2
5 ~ 7	7	9	→ -1 ↑ +3	+2
3 ~ 5	19	12	→ -3 ↓ +1	-7
1 ~ 3	22	18	→ -2 ↓ +4	-4
1 石以下	32	37	→ -1 ↓ +6	+5
0			→ +5 ↓ -9 ↑ +12	+3

備考 20~30石台に(+1分家)とあるのは、本文後述にみる如く五島八左衛門(8代)より出した分家である。

石高は二七七石五升四合であり、村高の四六・五%に及んでいる。この内一二石二斗一升八合を一户でもって所有する階層の存在する事は注目すべきであろう。これは後述にみる如く五島八左衛門(八代)なる者の

所有石高である。五島家のかかる所有石高、土地集中は、先述にみた如き貢租の過重化或は享保の飢饉(享保十八年「夫食被下置銘々割賦帳」によれば、当村百姓困窮夫食無御座及渴命候者共二七四人とある)等に

よる里小牧村農民の一般的困窮を背景に、高利貸資本をもって、或は直接田畑の永代売買を通じ、主として元祿享保期に行われたものと思われ、例えば、残存永代売証文一四八通の内この期のものが一〇四通、就中享保期のもの四四通残存しその集中石高二九石五斗余に及んでいる。斯る点から里小牧村の寛保元年における農民の階層分化の状態は、元祿享保期頃の土地集中・喪失によって著しく進められて来たものと考えられるのである。

以上寛保元年における里小牧村農民の階層分化の状態に概観を与えて来たが、次にこれより六年後の延享四年における階層分化の状態を寛保元年との比較においてみよう。

延享四年における高持戸数は九七戸であり、寛保元年のそれより三戸減少しており、又九七戸の高持内部において夫々階層にかなりの変動関係を認める事が出来る。斯る寛保元年より延享四年に至る農民階層の変動関係は、実際には第五表の如き階層或は階層内部の

石高の上昇下降の複雑な変動関係を経たその結果を表示したものに外ならず、第四表によっては把え得ない第五表の如き複雑な変動関係の存在した事に注意を払わねばならない。例えば寛保元年より延享四年に至って高持戸数三戸の減少は、この者の土地放棄或は無高化して行つた事は予想し得るが、しかし実際には寛保延享間において、無高化して行つたものは三戸以上を遙かに越す数であり、その半面無高層から高持化した現象の存在をみる事が出来るのであつて、第五表では五石以下就中三石以下の層と無高層との間にかなり、零細な田畑をめぐつての交替、零細高持―下降―無高化、無高―上昇―零細高持化の現象の存在した事に注目せられよう。

ところで第五表の如き複雑な変動関係を経た延享四年における階層分化の状態は、逐一寛保の前例に従つての説明は割愛するが、要するに此処では二〇―一〇〇石以上層は農民構成において五人で変りなく、五―二〇石層は二二戸より二五戸へと三戸増、五石以下層

は七三戸より六七戸へと六戸減となり、夫々の所有石高は二〇・一〇〇以上層は四六・五%から四四・八%

へ若干減じ、五一・一〇石層は三三・四%から三九・一%へかなり増し、五石以下の層は二〇・一%から一六・一%へ減少となつていて、此処では五・二〇石層就中五・一〇石層の進出のみられる事に注目せられる。この層は一四戸から一八戸に増し又その所有石高は一五・九%から二一・四%へと増しているのであるが、この高持戸数増加の点は、第五表において明らかな如く、一〇・二〇石層からの二戸下降、一・五石層からの三戸上昇、一・五石層への一戸下降という結果に基づいている。このような五・一〇石のいわば中農層の進出に就いては、如何なる事情によるものであろうか、資料的に充分な説明を与え得ないのであるが、しかし此処では一・五石層より五・一〇石層へ、三戸の上昇が認められるこの者の上昇事情に就いては、これを少しく明らかならしめることが出来る。以下若干この点に就いて述べ、もつて右中農層進出の事情をみよう。

徳川中期における尾張一農村の考察（岡本）

宝暦二年の「諸事記」によれば次の文書を見る事が出来る。

当村之御百姓すべて農ニ出精仕候得共、女房女子農間ニ而綿くり二三字むし世相見へ申候、村内之者伝左衛門、庄左衛門、林吉三人農間稼ニわた質集め、他所之商人へ売渡申五六文字し

先述の農業の生産構造において既に明らかな如く、里小牧村では資料的に寛延、宝暦においてかなりの綿作が行われていたものであった。ところで右文書によって窺い得る如く、この村では收穫された実綿は、村内婦女子の農間副業として繰綿に加工され、販売されていたものである。この事は、この村においては繰綿加工業といい得るような独立の営業は存在せず、ただ農間における婦女子の副業として、家内工業的な域にとどまるものであったことを示すものであろう。しかしてこうして加工された繰綿は、村内三人の綿仲買人の手によつて、他所商人に販売されていたものである。かかる村内における綿仲買人の他村における同様な事

第 6 表 宝暦 2 年（1752）綿仲買人の階層

	延享四年（1747）		寛保元年 （1742）	備 考
	石	畝	石	
傳 左 衛 門	6.394	50.29	3.774	寛保 2 年八左衛門小作
庄 左 衛 門	5.818	41.05	4.622	寛保 2 年八左衛門小作
林 吉	7.900	55.08	7.080	宝暦 5 年組頭

例は、後の天明年間の書とされる樋口好古の「尾張徇行記」に記されているところであり、例えばその一例として中島郡次郎丸村に就いて『高ニ準シテハ戸口多ク耕田不足ナル故（中略）他村ノ田畝ヲ半分ホト承佃ス、無高二十戸ホトアリ高持ハ平準ノ所ニテ小百姓多シ、農業ヲ生産トス、其余力ニ商ヒラスル者十六七戸アリ、繰綿ノ仲買ヲシ一ノ宮へ交易セリ』とあるが如くである。^⑫

ところで右里小牧村における三人の綿仲買人の石高階層はどうであつたかをみる事によつて、先述の問題解決の糸口を見出そう。宝暦二年時に

おける傳左衛門、庄左衛門、林吉の所有石高は不明であるが、宝暦二年より五年前の延享四年、一〇年前の寛保元年にどのような石高階層であつたかをみれば第六表の如くなる。即ちまず延享四年現在の所有石高をもつてみる限り、右三人はこの村のいわば中農層的な階層であつたといえる。しかし寛保元年の所有石高をみると傳左衛門、庄左衛門兩人は、三ノ四石層であり、第四表の階層分化表からみれば零細高持層である。この兩人は寛保二年の五島八左衛門の「田畑掟作帳」に現われる小作人でもある。しかしながら寛保元年より六年後の延享四年において夫々石高を増し五ノ七石層に上昇している。前掲第五表の階層変動関係表において、三ノ五石層から五ノ七石層へ三人の上昇が認められるが、この三人の中二人が実は傳左衛門、庄左衛門なのである。このような兩人の石高上昇の契機は、何によるものであろうか、後述にもみる如く高率な小作料にむすばれたこの村の地主小作関係に立っている、容易にかかる上昇の機会を見出されないかも知れ

ない。しかしながら右の如き上昇がみられているのは、他の事情の存在は別としても、先述にみたこの村の綿作の發展を背景に、需要性、商品価値の高い綿商品流通面に綿仲買人として、機を得てたずさわり得たその結果に、少なくとも負うものでないだろうか、兩人は林吉と共に延享四年の所有石高においては、いわば中農層に位置するに至っているが、宝暦二年においては、なお若干の石高上昇のあった事は予想される。右三人の内庄左衛門は宝暦五年における証文奥印に組頭の名をとどめ、村役人たるの地位に着いていることは注目すべきであろう。（宝暦五年、永代相渡申高之事）このように少なくとも綿作の發展を背景に零細高持＝小作人層から身を起し、村役人たる地位を得るまで成長し来ったいわばこの村の新興階層のその後の動向については蓋し興味ある問題であろう。しかし今はこれ以上述べべき資料はもたず、ただ此処では当面の問題たる五・一〇石中農層進出の事情に若干説明を与えたとどまる。

以上寛保元年、延享四年の六年間の距りをもつ両資料に基づいて里小牧村農民の階層分化の状態、その変動關係につきやや詳細に述べて来たが、要するに此処では一〇石以上、八〇石以上の所有石高をもつ階層の出現に対し、他方大多數の零細高持の存在或は無高の存在を知る事が出来、徳川中期における里小牧村では、既にいわゆる封建農民を農民として単一的に把える事の出来ない深い階層の存在する事を知る事が出来たであろう。

四、農民の階層關係

農村における商品・貨幣經濟の發達、貢租の過重化等を契機とした里小牧村農民の階層分化には、かなり著しいもののある事を知り得た。しかしして斯る階層分化によって齎＝らされた農民の階層關係はどうであつたか、この点を此処で述べる事としたい。

ところで農民の階層關係を述べるに當つて、前述にみたこの村のいわば上農層の階層的地位をまずみてお

第 7 表

	寛保元年 所有石高	延 享 四 年		備 考
		所有石高	所有面積	
五島八左衛門	① 121.218	① 102.773	754.17	年寄 庄屋・惣庄屋，御目 見苗字帯刀御免家格
恒 右 衛 門	② 75.856	② 82.111	634.16	
与 三 左 衛 門	③ 30.245	⑤ 25.285	180.11	百姓惣代
政 右 衛 門	④ 29.676	③ 31.446	222.29	組頭（寛延以降）
平 右 衛 門	⑤ 20.510	(19.147)	(136.01)	
友 四 郎		④ 27.029	194.11	庄屋（寛保一宝曆）八 左衛門弟

こう。

前述の如く上農層五人の石高所有は、村高の約四五%を占むるものであったが、それ等五人の者の石高所有關係を具体的に示すと第七表の如くなる。寛保元年における石高所有とその順位が、延享四年においてかなり変化をみせている。この内筆頭の五島八左衛

門は、一二一石余から一〇二石余に減少をみせているがこれは延享時四番に位する実弟友四郎を寛保二年分家せしめた結果にもとづいている。他の者は若干石高の増減をみせその順位を異にしているが、何れもこの村のいわば上農層である。

ところでこれ等の層は、いうまでもなく、村内における村役人としての地位に立っていたことは、第七表の備考に示されている如くである。又このように村役人としての地位にある上農層は、いうまでもなく、村落共同体的規制の頂点に立つて、その支配権を掌握している層でもあった。村落共同体的規制の中核をなすものは、村内における採草地、灌漑用水の共同体的利用にあると考えられるが、先述にみた如く里小牧村においては、すではやくから購入肥料の利用をもって畑作経営が行われていたものである。しかしこのような購入肥料利用面から、採草地における共同体的利用その規制が少しは弱められたと考え得ても、肥料の主体はなお村内自給肥料にあったと考えられるこの村の農民は、採草地への共同体的利用、その規制に大きく支配されていたものと思われる。里小牧村における自

給肥料の給源地は、主として村内の柳枯草場にあったが、これに就いて、『反数二二町四反五畝二三歩松柳生砂場——庄屋村役諸事引受薪草等苅採方取斗申候』（文化六年）とあって、柳枯草場の共同体的利用の管理支配権が庄屋村役人の手にあつた事を明らかにしている。このように里小牧村における上農層は、多く政治社会的には村役人としての地位にあるとともに村落共同体的規制の頂点に位置している層でもあつたが、彼等は村内におけるかかる政治的地位を利用して、経済的には一般農民よりも有利な生産条件の一つを確保し、生産を有利に導いていたことは想像に難くない。さて、われわれはかかる上農層の土地経営面について次に考察せねばならない。土地兼併喪失のいわゆる農民の階層分化についてはすでにみたところであつたが、かかる階層分化が農村における商品貨幣経済の発展に一つの契機を与えられている限り、かかる階層分化の進行事態のうちに、当然地主小作関係の存在が予想され得るところであらう。われわれは以下右上農層、

徳川中期における尾張一農村の考察（岡本）

第 8 表 手作、小作経営規模（寛保 2 年）

		畑 合		方		方	
		畝	%	畝	%	畝	%
八 左 衛 門	手作	232.17	25.9	117.23	24.2	114.24	27.9
	小作	665.05	74.1	368.03	75.8	297.02	72.1
	計	897.22	100.0	485.26	100.0	411.26	100.0
友 四 郎	手作	118.18	48.8	69.12	52.6	49.06	44.3
	小作	124.11	51.2	62.13	47.4	61.28	55.7
	計	242.29	100.0	131.25	100.0	111.04	100.0

特に資料的に説明し得られる五島家を中心、地主小作関係の存在をみよう。

寛保二年（一七四二）

に友四郎は五島八左衛門（八代）より分家したものであつたが、その際の「高田畑分ヶ帳」「八左衛門

友四郎兩人手作覚」によれば、第八表の如き手作、小作経営規模を知る事が出来る。すなわち表によれば、

八左衛門の場合、所持田畑八町九反七畝二二歩のうち、手作分は二町三反二畝一七歩二五・九%、小作分は六町六反五畝五歩七四・一%となっていて、所持田畑の四分の三の圧倒的部分を小作に出しており、小作料依存への寄生地主的性格を極めて濃厚にしている。これ

に対し友四郎の場合、二町四反二畝二九歩の所持田畑のうち、手作分は一町一反八畝一八歩四八・八%、小作分は一町二反四畝一歩五一・二%であって、所持田畑の二分の一強を小作に出し、やはり寄生地主的性格を強くしている。右兩人の手作、小作経営規模の斯る事例から推察すれば、延享四年六町三反四畝余の田畑をもつ恒右衛門の如きは、少なくとも四町前後の小作關係に、又政右衛門、与左三衛門なども夫々或程度の小作關係に立っていた事は充分に想像し得よう。

以上の如く中期における里小牧村では、右八左衛門、友四郎等の手作、小作経営規模の事例に見る限り、か

なり広汎な地主小作關係の存在をみる事が出来るのである。

次に斯る地主小作關係の説明を通じて、里小牧村農民の階層關係を考察する事としたい。この点を窺い得る資料として、此処では寛保二年五島八左衛門「田畑掟作帳」を取り上げ、この分析を中心に右の点を考察する事とする。

右「田畑掟作帳」によれば、八左衛門の小作地は前

第 9 表 寛保 2 年小作人の階層性

階 層	人 数	面 積	小作料
8石以上	人 0	畝 0	石 0
7石以上	1	14.23	1.255
5 ~ 6	2	20.05	1.964
3 ~ 4	6	142.21	13.108
1 ~ 2	9	141.06	15.025
1石以下	7	137.19	11.522
無 高	11	189.00	14.108
他 村	3	19.21	1.852
計	39	665.05	58.8 ³⁴

註 小作人の石高基準は寛保元年村高帳による。従って、石高基準には若干の誤差を見込まねばならない。

第10表 寛保2年八左衛門小作人小作面積

小作地 面積	人 数	面 積	一人当 平均
5反以上	0	0	0
4反以上	2	84.25	42.14
3反以上	5	162.26	32.17
2反以上	8	179.02	22.11
1反以上	10	138.18	13.26
1反以下	14	99.24	7.04
計	39	665.05	17.02

記の如く六町六反五畝五歩であり、この小作地に入組んでいる小作人総数は三九人（内他村三人）となっている。これ等小作人は第九表にみる如く殆んどが極めて零細な高持或は無高層であつて、村内五石以下無高層合して三三人、全小作人の約八五%に当り、小作人の階層性を明確にしている。先述の農民階層分化表に現われた五石以下の層は、多く斯る小作人として存在していた事は疑い得ない。次に三九人の八左衛

門小作地の入組關係をみると、最高四反六畝七歩から最低二畝五歩となつていて、第十表にみる如く一人当平均

小作地面積は、一反七畝二歩の極めて零細な小作地となつている。このような一人当平均小作地面積以下の小作地を請けているものは、小作人全体の六〇%前後もあり、極めて小刻みな小作地關係に立っている。この事は八左衛門の小作人が只一人八左衛門の小作人たるにとどまらず、村内他の地主の小作人ともなつていた事は容易に想像し得よう。里小牧村における斯る小作人は、単に村内地主のみに限らず又隣村地主の小作人ともなつていた事は、次の文書によって明らかである。

当所へ、人多候而他郷之地所不作しては相成ましく、黒田村内北宿之地所、曾根村之地所受作行候、南之所ニ而は、玉の井村へ掟申候。（宝暦二年「諸事記」）
里小牧村における村人口は、元文元年（一七三六）の「村人数書上帳」によれば六一一人（下男下女、他出奉公人を含む）とかなり多く、この世帯戸数は明らかでないが、先述の元文二年「覚」によれば『惣百姓一二九軒』となつていて、この戸数をもつてする里小

牧村一戸当平均耕作面積は、大体四反歩足らずという耕地の狭少を示している。このような事情から恐らく五石以下無高層による出作が多く行われていたものと思われる。八左衛門の小作人として三人の他村玉の井村よりの入作がみられるが、右の如き村の耕地事情から出作が多く行われていても、入作は稀にしか存在しなかったものと考えられる。

ところで農民階層関係の主軸をなすものは、地主小作関係であり、地主小作関係の中心をなすものは小作料收取関係にある。従って小作料收取関係の問題は、農民階層関係を考察するに当つての最も重要な問題とならざるを得ない。斯る意味において次に小作料関係をみなければならない。

右八左衛門「田畑掟作帳」におい

第11表A 八左衛門小作関係

	面 積	小 作 米	反当小作料
	畝	石	石
田	上中田 251.02	27.028	1.077
	下 田 117.00	10.254	0.876
畑	畑 297.03	21.552	0.722
計	665.05	58.834	0.885

第11表B 貢租，地主，小作取分関係

	反当収量	反 当 小作料	貢 租	地 主	小 作
	石	石	石	石	石
上中田	1.500	1.077	0.650	0.427	0.423
下 田	1.200	0.876	0.500	0.376	0.324
畑	1.000	0.722	0.383	0.339	0.278
	%	%	%	%	%
上中田	100	72	43	29	28
下 田	100	73	42	31	27
畑	100	72	38	34	28

註 反当収量は宝暦2年「諸事記」による。
貢租は五割とす

で計算される掟米Ⅱ小作料総額は五八石八斗三升四合であるが、第一一表Aに示されているように、本田畑反当平均小作料は八斗八升五合となっている。斯る小作料が高額なるや否やはその年の反当実収量をみる事によって判明し得よう。しかしてこの点につき前述の

宝曆二年里小牧村「諸事記」に記載の反当実収量をもつて計算すれば、第一表Bの如く、地主、小作の取割合は前者約七二%（貢租分を含む）に對し後者約二八%となり、此処における地主小作關係は、高率な小作料によつて結ばれたそれとしてみる事が出来る。斯る高率小作料をもつて結ばれた小作人層の生活は一般的には極めて困難のものがあつた事いまでもない。

しかし右の小作料が、小作人にとっては極めて高率なものであり、小作人の農業經營を困難にし、生活を困窮ならしめる程のものであつても、小作料收取に常に腐心している地主にとっては事情は異なる。寛保二年弟友四郎分家の際の「高田畑割賦帳一冊つゝ」に、八左衛門は小作料收取について、現在の小作料を『直安』となし、弟友四郎に『掟直』又は『取上』を主張しているのであるが、八左衛門の「田畑掟作帳」には、右の地主としての考え方がそのままこの帳に記載されている。今その一二の事例をみると左の通りである。

○彌右衛門、下田、二反一畝歩、此掟米一石九斗八升

五合

是ハ下田ニ御座候も、近年よき田に相成候而、掟直致べく候、もし彌右衛門不平申候得は、取上他に貸申べく候

○伊兵衛、合、上中田、一反六畝一步、此掟米一石六斗九升三合

是ハ安ク見へ申候、何連も上之よき田ニ而、大風ニ而も、少しもまけ申間數候

寛保元年の「村高帳」では彌右衛門二石八斗九升、

伊兵衛一石二斗七升三合とあつて何れも零細高持である。これ等兩人の八左衛門との小作料收取關係は、第一〇表の平均小作料と比較すれば、彌右衛門の場合下田九斗四升五合とかなり高く、伊兵衛の場合一石五升八合とやや低くなつてゐるが、要するに斯る高率小作料にも拘らず、彌右衛門事例の但書にみる如く、八左衛門地主は彌右衛門の下田を「近年よき田ニ相成」つたとし、小作人のいわば生産力上昇部分に對し、『掟直』小作料引上を要求し、もし彌右衛門が不平を申せば

『取上』他人に貸すというのである。当時小作せずしでは生計の道を得るに乏しい事情の下にある零細農民にとつては、村の耕地狭少とも相俟つて、地主のこうした要求には何れ従わざるを得ない。此処では小作人の耕作権は極めて不安定なものとなつていてと共に、斯る経済的な力関係の面から生ずる地主への隷属的關係は之を濃厚ならしめるものがあつたと思われる。斯くの如く小作人は一方において『掟直』による小作料の苛酷な取立或は『取上』による耕作権の不安定な状態に立たされていると共に、他方伊兵衛事例にみる如く小作料は『大風ニ而も少しもまけ申間敷候』とされているこのような事情の中に中期里小牧村地主の封建的性格をみる事が出来る。このような地主の小作人に対する小作料取立の苛酷さは、一般に小作農民の農業の再生産過程を圧迫し、農民の生活を窮乏に陥し入れるものであつた事いまでもない。例えば、前例の彌右衛門は寛保元年二石八斗九升の所有石高から、延享四年に至り二斗五升に石高を減少せしめており、又伊兵衛

は延享四年に至つて名が見当らず、恐らく石高を全く喪失して行つたものである。以上述べ来たつたように零細農民Ⅱ小作農民は高率小作料を契機として多くの場合窮乏化して行くものであるが、かかる窮乏の結果は、家族労働を他に放出する層へと転落するに至る。第一二表の寛延三年（一七五〇）「村人数改之帳」における他出奉公人放出の階層はこの点を明らかにしている。この表の石高は寛保元年、延享四年のそれであつて、寛延三年の石高ではないが、延享四年より三年後の寛延三年においてそう著しい石高の変動はなかつたものとすれば、他出奉公人放出の階層は、一石台以下の極めて零細な高持或は無高という事になる。他出奉公人放出の者は一九人であるが、このうち一〇人（表〇印）の者は八左衛門「田畑掟作帳」に現われる八左衛門の小作人である。又兵衛一例を除けば、石高所持者は全部寛保より延享にかけ石高を減少するか喪失している事に注目せられる。前例に見た彌右衛門もこの表に現われているが、石高減少とともに寛延三年現在三人の

第 12 表 寛延 3 年（1750）他出奉行人放出の階層

	所 有 石 高		奉公人続柄		行 先
	延享 4 年 (1747)	寛保元年 (1741)	本人	俵 娘	
新右衛門°	石 0.450	石 2.900	2		竹鼻村，黒田村
丹右衛門°	.	.	2		小原村，長池村
加右衛門	.	0.050	2	1	北方村，割田村，黒田村
兵右衛門°	.	.	1		一宮村
長 助°	.	.	1		割田村
米 助°	.	.	1		割田村
彌右衛門°	0.250	2.890	1	2	内割田村，赤田村，笠松
茂 兵 衛	1.830	1.900	1		名古屋
五右衛門	0.120	0.200	1	1	名古屋，黒田村
半左衛門	.	.	2	2	割田村，大毛村，北方村 名古屋
又 兵 衛°	0.300	.	1		北方村
清 蔵	0.665	1.165	1		岐阜
彌 兵 治	1.081	1.081	1		北方村
由 兵 衛	0.100	0.067	.	1	割田村
藤 九 郎°	1.399	2.829	1		竹鼻村
源 八	0.040	0.240		1	笠松
所右衛門°	0.050	0.100	3	1	笠松，北方村，黒田村， 外割田村
藤 三 郎	.	1.500	1		やぐま村
忠右衛門°	0.100	1.313		1	美濃舟橋村
19戸			計 男 20人 女 12人		

備考 °印は寛保 2 年五島家の小作関係を示す，所有石高は，延享 4 年「御蔵
入百姓高田畑書上帳」寛保元年「里小牧村村高帳」による。

子供を他出奉公に出す階層に転落しているのである。

以上里小牧村農民の階層分化に關連し、此処における農民の階層關係について、地主小作關係を中心に叙述して来た。此処では里小牧村最大地主五島八左衛門（八代）の、そこにおける地主小作關係を主としてみて来たのであったが、五島家の場合など所有田畑面積約九町歩のうちその約四分の三を小作に出すという、小作料依存への寄生地主的性格を早くからもつに至っており、かかる小作地は主として村内五石以下層の小作地に提供し、極めて小刻みな地主小作關係に立っていた。しかし其処における地主小作關係は、極めて高率な小作料でもって結ばれた關係であり、斯る關係を通じて零細小作農民は、先述の綿仲買人たる傳左衛門、庄左衛門の如き上昇の者の存在はあったといえ、多くの場合更に零細化、困窮化して行ったものである。農民の階層分化は一つにはかかる点にも大きく契機づけられるものである。幕末天保五年に至って里小牧村では地主（五島家を中心とした高持層、大前層）と小

作人（小百姓、小前層）との間に高率小作料をめぐる所謂小前騒動がみうけられるが、斯る騒動は農民階層關係の一つの集中的表現とみることが出来る（天保五年小作之者、年貢引方ニ付「指出申連印済口証文之事」）

（あとがき、以上主として寛保元年（一七四一）から宝暦二年（一七五二）に至る約十年間の資料を中心として、里小牧村における農業の生産構造、或は農民の階層分化の狀態と農民の階層關係といった点に就いて若干考察し来たものである。しかし冒頭掲げた資料のみにては充分に之を説明し得ず、ただ資料的に説明し得られる限度における現象形態の把握に終始され、此処では斯る現象の因つて起る本質的問題には充分な説明を与える事が出来なかつたが、幕末期小牧村或は近傍農村の資料に基づく他日の報告の機会に、補足的説明を与えたいと考えている。）

① 尾張葉栗見聞集一二九頁、尾張名所図絵後編五等参照
起町史下巻二三八―九頁参照

② 尾張葉栗見聞集（尾州里小牧村御船守船頭之事）一八

七―八頁、愛知県史第二卷（里小牧村の渡場）六五九
―六六〇頁、一宮市史上巻（綿類出津差留令）一〇六

―二頁等参照

④ 「懷中日記」（五島家一代八左エ門幸安）

⑤ 愛知県史第二卷第二卷二八一頁

⑥ 右同書別卷六三六頁（「古義三」四ツ概）

⑦ 里小牧村の村高は、弘化・万延間において、酉新田分は三石一升七合増し村高六〇〇石六斗七升一合ともなっているがその点明らかでない。

⑧ 享保十九年「本高内砂吹埋禿地書上帳」

⑨ 「百姓伝記（日本経済大典第三十一）六四九頁

⑩ 愛知県史第二巻、五七八（五八二頁参照、川浦康次氏「三八市場の開市と発展」（調査と資料第六号）には一

宮六斎市（三八市場）に就いて詳細な研究がある。

⑪ 「元禄三辰年ノ寛保三亥年迄御免相書上帳」、「安政六末年ノ明治元辰年迄拾ヶ年御免状写」、貞享、元禄、享保、宝暦、明和各「里小牧村地帳」、これ等の帳から里小牧村では大体寛保頃より定免制が行われた事になっている。

⑫ 尾張藩の徳川中期以降における領内貢租率平均は、免三ツ五分前後であったとされている。所三男氏、「尾張藩の財政と藩札（一）」（社会経済史学、第四巻、第七号）

⑬ 愛知県史別巻、六三六頁（「古義三」四ツ概）参照

⑭ 樋口好古著「尾張徇行記、中巻」八二四頁

〔附記〕本稿において利用した資料は、愛知県葉栗郡木曾川町里小牧、五島熊二氏所蔵の文書である。資料閲覧の便宜を与えて下された同氏の御配慮に対し、心から謝意を表するものである。